学習院女子短期大学紀要　XXVI　1988. 12. 25

ジョヴァンニ・ピーコの『演説』考
――「半神の恋」とその意義――

根占献一

はじめに

「人間の尊厳」に関わるテーマは、ギリシア・ローマの古典とキリスト教の聖書的・教父的伝統を背景に有しているが、ルネサンス時代を特徴づけるものとされてきた。中世盛期のロタリオ・デ・コンティ(Lotario de' Conti)――後のローマ教皇インノケンティウス三世(Innocentius III)――の著作、『世俗蔑視論、或いは人間的条件の悲惨さについて』(*De contemptu mundi, seu de miseria humanae conditionis*)に対する反論の或いは補足の形式を取るのであれ、取らぬのであれ、確かに、十五・六世紀には人間を礼賛する叙述が数多く見られる。(1) そしてそのような記述の中で最もよく知られている作品は、ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラ(Giovanni Pico della Mirandola)の『演説』(*Oratio*)であろう。その中の、神をして人間アダムを誉め讃える一節は極めて有名であり、現代の哲学者や文学者たちによって好んで引用されてきた。近年では、たとえばフロム(Fromm)の『自由から逃走』(*Escape from Freedom*)やユルスナール(Yourcenar)の『黒の過程』(*L'Œuvre au noir*)でそれぞれ、巻頭言として使われ、人間の精神的自由とこれの持つ事の重大性が暗示されている。人によってはまた、『演説』に冠せられた「人間

の尊厳」(dignitas hominis) という成句をピーコ自身の着想と思うかも知れない。そのような人は、鷗外の『青年』の中に dignité という言葉を見出す時、これすらもピーコから由来したのではと考えたくなろう。「人間の尊厳」はそれ位ピーコの名と結びつき、時代の人間性重視のマニフェストとされる。

しかしピーコのこの小作品は幾つかの問題点を有しており、従って全体を仔細に検討し、前述の有名な箇所――我々も亦、これを本論で引用しよう――を彼自身の体験から実感された内容として捉えるならば、『演説』の従来の見方が一方的で片手落ちであり、また時には誤っていることが理解されるであろう。拙論の目的は一にここにあり、結果として、ピーコの思想とルネサンスの時代内容に関する新たな認識が生じることを願っている。

註

(1) これについては邦語文献では佐藤三夫『イタリア・ルネサンスにおける人間の尊厳』(有信堂 一九八一年) 第一章が有益である。またこの方面の欧米の第一人者の文献に次のものがある。Ch. Trinkaus, *"In Our Image and Likeness", Humanity and divinity in Italian Humanist Thought*, 2 vols., Chicago, 1970. Id., The Renaissance Idea of the Dignity of Man (in *The Scope of Renaissance Humanism*, Ann Arbor, 1983), 343-63.

(一)

一四六三年に北伊ミランドラに生まれ、九四年に三一歳の若さで亡くなったピーコの生涯は破乱に満ちたものであったが、分けても八六年と八七・八八年は注目すべき年であった。それは、一方では恋愛事件となり、他方ではローマ教会との衝突となって現出した。八六年から八八年の足掛け三年間は、その前の数年間、つまり八四年から三年間に渡る、学的愛に燃えた期間[1]に続いた衝撃的でスキャンダラスな時代となった。彼の『演説』と『プラトン主義者の

精神と意見によって、フィレンツェ市民ジローラモ・ベニヴィエニにより作られし愛の歌註解』(*Commento sopra una Canzona de Amore composta da Girolamo Benivieni Cittadino Fiorentino secondo la Mente et Opinione de' Platonici*) はこの恋愛騒動ののちに書かれ(生前はともに出版されず)、同じく『九百の提題』(*Conclusiones sive Theses DCCCC*) も同じころに形を成したが、こちらは八六年十二月に出版された。そしてこれは翌年ローマ教会から三提題が異端的とされ、やがて紆余曲折を経て彼自身フランスへ亡命し、逮捕されるという、八八年初め迄続く長期に及ぶ事件となった。[2]『演説』はこの提題の為の討論会に用意されたのであり、この演説がその開会の言葉となるはずであった。

この小論では最初の事件を採り上げてその意義と影響を考察する予定であるから、この事件の顚末[3]を詳しく述べてみることにしたい。

一四八六年の春、ローマでの公開討論に備えて学的野心に燃えた『提題』を用意していた頃、ピーコは愛の熱情にも取りつかれた。二三歳の若者は留学先のパリ大学を去って永遠の都へ赴く途中、フィレンツェに立ち寄った。この町とは数年前から親しんでおり、ロレンツォ・デ・メディチ(Lorenzo de' Medici)、ポリツィアーノ(Poliziano)、ベニヴィエニ、フィチーノ(Ficino)などの友人がいた。

五月八日、彼は二十人の供とともに市当局の交付した通行券を持ってフィレンツェをあとにした。荷は数日前にローマに発送してあった。翌日の夕刻、アレッツォに着き、近郊の親類を訪問中の折、一女性と出会う。婦人は美しかった。その夜の宿はアレッツォ市壁の外に取った。

魅力的で資産家の婦人の名はマルゲリータ(Margherita)と云い、夫の名はジュリアーノ・ディ・マリオット・デェ・メディチ(Giuliano di Mariotto de' Medici)[4]で、当地のしがない収税吏であった。彼女は前夫を亡くしてすぐ

の再婚であった。コスタンテ・スペチャーレ（Costante Speciale）某という名の亡夫は、パリオ（競馬レース）用の馬を飼育・調教して、相当裕福に暮していた。再嫁先はその名字から知られる通り、フィレンツェのメディチ家と同系であるが、但しこちらは豊かな一家ではなかった。

十日の正午、マルゲリータは侍女一人、それに彼女の夫に仕えていた年のゆかぬ給仕一人を連れて、ミサに参列すべく家を離れた。古大聖堂は市門の外にあった。彼女がピーコとその一行がいる所に近付くと、彼女は直ぐにピーコの馬の添え鞍に抱え上げられた。彼が引き連れていた一団は、ある者は騎乗し、ある者は徒歩きし、傍を馬に乗った射手が二人進んでいたが、彼女が同乗するや、シエーナ目指して全速力で疾駆し始めた。

驚いた侍女は直ちに引き返し、女主人の誘拐を市の隊長（カピターノ）に知らせた。市の鐘（トクセン）[5]が激しく打ち鳴らされて、二百人を越す追討の一行が集められた。その中にはマルゲリータの夫もいた。追跡団はやがて追い付き、戦闘となる。戦いはどれ位続いたであろうか。その間に人妻は馬から降ろされ、ピーコ側に十七人の死者が出た。彼自身も深くはないが二箇所に傷を負った。アレッツォ側には何人の戦死者が出たかは不明である。参戦者の数はピーコの方が圧倒されており、衆寡敵せずであった。彼はその秘書ともども、この場を去って近くの町、キアーナの谷間のマルチァーノに一旦は逃れえた。彼らの馬が駿馬であったからである。が結局は捕ってアレッツォに連行され、投獄される羽目となった。女の方は歓呼の声で市に迎えられた。

この事件の発端から不明な点を考えてみたい。そもそもピーコはマルゲリータにこの時初めて会い、激しい恋に囚われたのであろうか。また囚われたのは男の方だけであったのか。以前から両人が知り合いであったかどうかは判らないが、初対面で恋に陥ったとしても不思議ではない。ルイジ・デッラ・ストゥッファ（Luigi della Stuffa）はロレンツォ・テ・メディチに、彼女が「とても美しい肉体に盲目的に恋をして、自らの意志で馬に乗った」[6]と報告した。

ピーコの兄弟アントン・マリア（Anton Maria）の妻、コスタンツァ・ベンティヴォリョ（Costanza Bentivoglio）の書簡（五月十六日付け）も女性が従ったと云っている。

それともピーコの有無を云わさぬ掠奪であったのか。秘書は別にして、いかに殿様の子とは云え、小さな軍団を引率しているのはおかしくはあるまいか。フィレンツェを立つ時既に、前から見知っていたマルゲリータを誘拐することに決めていたとは考えられないか。重要な旅行ではピーコは常に二十人から二五人の家来を連れていたと云うが、戦いに備えての小人数の軍勢ではなかったのか。[7] 彼女の夫がロレンツォにあてた書簡によれば、妻は市門の外で無理やりにピーコの馬に乗せられたのだった。

が、フェラーラのフィレンツェ大使、アルドブランディーノ・グイドーニ（Aldobrandino Guidoni）は事件の二日後、エルコーレ・デステ（Ercole d'Este）に「前からの約束により、件の婦人は家を出、散歩に行く風を装った」[8]と書いて寄越した。夫も妻が息抜きをすべく教会に行こうとしたことを認めている。ピーコとマルゲリータがこれ以前から顔なじみであり、二人が示し合わせ、ローマ行きを道行きにしようとしたとも考えられる。[9] 前出のコスタンツァの書簡ではマルゲリータは「優美なフィレンツェ女性」[10]と云われているから、フィレンツェで知り合っていた可能性もあろう。

マルゲリータに連れ添っていた二人のうち、給仕はどうしたのか。夫の書簡によれば、その子は彼の金品を盗んでおり、主人宅に戻る気はなかったらしい。伝記作家ゴーティエ・ヴィニャル（Gautier Vignal）は彼女が彼に計画を知らせていた[11]とするが、果してどうか。少年（fanciullo）に家出を教えることが利点になるか疑問である。

アレッツォ市当局は事件を全住民に対する犯罪行為であると非難したが、フィレンツェの実力者でマルゲリータの夫の遠縁筋にあたるロレンツォ・デ・メディチの尽力[12]により、ピーコは釈放された。ロレンツォはデッラ・ストゥッ

ファの報告により、アレッツォ市のように考えなかったし、被害者の夫もロレンツォの善処を期待していたため、事件自体はすぐに決着した。

註

(1) E. Garin, *Giovanni Pico della Mirandola, vita e dottrina*, Firenze, 1937, 20. 以下彼の著書は初出以外は出版年次で区別する。

(2) しかしピーコへの宗教的赦免はインノケンティウス八世（Innocentius Ⅷ）からは得られず、次のアレクサンデル六世（Alexander Ⅵ）を待たねばならなかった。一四九三年のことである。

(3) これについては、Von Reumont, *Lorenzo de' Medici*, Leibzig, 1883, II, 83-4, E. Armstrong, *Lorenzo de' Medici and Florence in the Fifteenth Century*, 1923, 347-49, Della Torre, *Storia della accademia platonica*, Torino, 1968, 758-60, Gautier Vignal, *Pic de la Mirandole*, Paris, 1937, 93-7, J. Jacobelli, *Pico della Mirandola*, Milano, 1987, 73-7, Garin, 1937, 25-6, Id., *Giovanni Pico della Mirandola*, Parma, 1963, 35-38. から一次史料を得た。本文で述べる事件の参加者や死傷者の数は文献により異同があるが、一々断わらず、妥当と思われる方を採った。

(4) E. Grasselini e A. Fraccassini, *Profili medici*. Firenze, 1982. にその名を見出せなかった。

(5) tocsin (campanello d'allarme) については、高橋安光『近代の雄弁』（法政大学出版局　一九八五年）、特に第三章に興味深い記述がある。

(6) Della Torre, *op. cit.*, 758n.3. ピーコが美貌の持ち主であったことは有名。幾つかの画像が今日に伝えている。そのような画像のひとつを見た者にモンテーニュ（Montaigne）がいる。『モンテーニュ旅日記』（『モンテーニュ全集8』関根・斎藤訳　白水社　一九八三年）一九一頁参照。

(7) 近藤恒一『ペトラルカ研究』（創文社　一九八四年）三九頁に類似の事件が挙っている。「教会法を専攻する一学生が、武装

せる十六人の学友の助けをかりて、ある公証人の娘を掠奪しようとしたが果さず、捕えられて裁判にかけられ、死刑に処せられ」たと。

(8) Von Reumont, *op. cit*, II, 83.

(9) 作者不明の『いとも高貴なる家系ピーコの年代誌』(*Cronaca della nobilissima famiglia Pico*) ではそうである。これについては Della Torre, *op. cit.* 758 n.3, Jacobelli, *op. cit*, 73-4. 参照。P-A Ladame, *Le fidèle d'amour, roman*, Paris, 1984, 123. はピーコとマルゲリータが以前、ヴェネツィアのカーニヴァルで知り合ったとして、物語を進めている。

(10) Garin, 1937, 25.

(11) Gautier Vignal, *op. cit*, 95.

(12) 時期的には遡るがアレッツォのロレンツォ観については、Lorenzo de' Medici, *Lettere*, I (1460-1474), a cura di R. Fubini, Firenze, 1977, 28n.1. 参照。

(二)

しかしピーコにとっては無論、事件の解決とともに総てが終了したわけではなく、後述するごとくいつまでもこの時の失態が苦々しい思い出として刻まれた。前述のグイドーニはこの件に関し、次のように結んでいる。「この不幸な出来事は、伯爵にとって本当に後悔の種となった。何故なら彼は学者であることは勿論のこと、聖人とすら見なされていたからである。今やこのフィレンツェで彼は名声と地位を失ってしまった。似たような間違いが、ヴィーナスが燃え上がらせる愛によって数多くの人に起るけれども。」[1] かつてルネサンス史家として令名を馳せたアームストロングは、フィレンツェが低からざる基準を有していたことを認めながらも、ミランドラ伯爵の情熱的恋愛が「あの感覚の堕落、つまりプラトン主義者たちの俗愛 (amor vulgaris) についての痛ましい注釈[2]」となったと書いた。

フィチーノを始めとするプラトン主義者たちは、決して世俗愛を否定するものではなったが、人品卑しからざる人物によって異常な形でこの世の愛が行なわれただけに、大いに世間の耳目を引いた。著名なプラトン主義者の一人でピーコと同じくカバラ研究家でもあった教会人、エジディオ・ダ・ヴィテルボ（Egidio da Viterbo）の手稿中には、次のような言辞が見出される。「ピーコがマルゲリータとそうであったように、男たちは他の夫たちの妻と姦淫をなさぬよう、一緒になってはいけない。」「ピーコよ、君も私も決して完璧でなかったことを私は証言する。」「果して誰が嫉妬に抗し得るであろうか。ミトリダーテースは抵抗できなかった。[3]」

事件に落胆と失望を味わった人々がいる一方で、ピーコのために弁明する人々もいた。フィチーノはそのような一人である。その弁明の方法は、しかしながら、幾人かの人がしたように、マルゲリータがピーコを惑わしたという理由で、女性の側に非を認め、男性を弁護するのとは異なっていた。この釈明法では、依然として誘惑された方にも落度があることに変わりがない。

フィチーノによれば、ニンフ、マルゲリータはアポロンとアフロディーテ（ヴィーナス）の娘で、ピーコはメルクリウスとアフロディーテから生まれた半神（heros）であった。ニンフと云うものが人間どもでなく半神たちのものであることを思えば、ピーコが人間の手から美しいニンフを引き離したのは当然であった。ピーコの行動は従って敬虔で勇気ある行為ということになる。これに対しアレッツォの住民はどうかと云えば、彼らは再びニンフを捕えたから、神の法に背き幸福を損う、軍神マルスの従者たる悪魔（Demones）であると判定される。「神の法を知らぬ大衆は残忍なマルスを是認し、かつ敬虔な半神を否認している。[4]」

ピエル・レオーネ・ダ・スポレート（Pier Leone da Spoleto）あてのもう一つの弁明書では、次のようにこの事件が云われる。「人によって捕えられたニンフ、それ故奪われることを願っているニンフを取り戻し、それどころか抱

擁さえすることは、奪うことでなく、略奪者から解放することである。」続けて、偉大なものは偉大な者に似つかわしいという論理が展開される。パリスがヘレナを、テセウスがアリアドネを、ヘラクレスがイオレを、プルゥトォがプロセルピーナを、ユピテルがエウローパを、それぞれ相応しいから奪ったように、ピーコはマルゲリータを奪った。従って愛に値するから愛によりなされた事を憎しみで追求する者は、総ての中で最高の憎悪に値する[5]と判断される。

以上のようなフイチーノの弁明書は、いかにも彼らしい口吻ぶりを伝えている。アレゴリーを好む云い廻しは彼に特徴的である。しかし往々にして過度の誉め言葉による高調した表現がどの程度人々を納得させたかは、不明である。この二通とも全集に収録されていないから、後世の眼に触れる機会は少なかったであろう。これらを、事件の張本人ピーコが仮りに読むことがあったとしても[6]何の救いにもならなかったと、考えられる。何故なら彼の苦悩はそれ程深かったからである。そのことは彼の書簡と著述とが明瞭に示しているわけだが、一人称で語られる書簡は別にして、これ迄彼の幾つかの著書にこのことを読みとることは行なわれてこなかったし、そこに彼の転機が求められることもなかった[7]。

事件後傷心し切った彼はペルージアに引き籠もった。ここで八六年十月十五日、友人アンドレア・コルネオ・ディ・ウルビーノ（Andrea Corneo di Urbino）あての書簡が認められた。この書簡の重要性はE・ガレン（Garin）が強調している通りである[8]。その内容は以下のようになろう[9]。

コルネオは、ピーコが世間から姿を消し、研究に没頭しているのを残念に思いながら、元気を取り戻し、俗間に戻ってくることを願っていた。彼にとってピーコの過ちは許せたし、誘惑に負けないためには妻を娶れば済むことであった。これに対しピーコには、ダビデ、ソロモン、それにアリストテレスまでが犯したことのある誤ちの例も慰安にならず、唯嫌悪すべき事柄でしかない。彼は罪を犯したことを嘆き悔いるばかりで、言い訳などする気はさらさらな

い。勿論、人間ほど意志薄弱な存在はなく、愛欲ほど強いものはないことを認めながら、具体例を示す。ヒエロニムスのあの不屈で強い心も、天に心が向けられていたのに、若い娘の踊りに興奮した。聖人をさえ悩ませた、ペストのように厄介な物からまぬがれるのは難しい。情欲が人里離れて、地べたで暮し、断食している者にそのようにまとまわりついてきたのなら、恵まれた屋根の下、柔らかい床で寝起きしている者には抵抗できる代物ではないであろう。が犯された罪は罪であり、初めてだからと云うことで許されたりはしない。たったの一度さえ難破したことのある者は、海神ネプトゥヌス（ポセイドン）を怨めしく思おう。

この時のピーコにとり、友が求めた公的・活動的生活は問題にならない。深く内面に沈潜し、精神の静けさを求める哲学研究の生活こそが価値あるものとして強調され[10]、それが『演説』でも謳われる。

註

(1) Von Reumont, *loc cit.*, Armstrong, *op. cit.*, 348, Jacobelli, *op. cit.*, 75.

(2) Armstrong, *op. cit.*, 348-49.

(3) Ms. Angel. 1253 (*Tractatus de anima*), f. 18r-19r. Garin, 1963, 35n. 20 に引用されている。

(4) *Supplementum Ficinianum*, ed. P.O. Kristeller, Firenze, 1937, I, 56.

(5) *Ibid.*, 56-7.

(6) ピーコが読まず、知らなかったとしても、似た調子の書簡がフィチーノからピーコ自身に出されており、この方は全集に入っている。Ficinus, *Opera omnia*, Torino, 1962, 886. ただこれは恋愛事件後の教会との衝突に関わっている点が注意されねばならない。

(7) de Lubac, *Pic de la Mirandole, études et discussions*, Paris, 1974. は例外的であるが、ピーコの思想上の転換をこれ

以前に求め、恋愛事件はそれを決定的ならしめたという見解を採っている。*Ibid*, 360, 364. 唯このド・リュバックのとともに評価の高い研究書、Di Napoli, *Giovanni Pico della Mirandola e la problematica dottrinale del suo tempo*, Roma, 1965. が参照できずに終ったことを断わっておきたい。

(8) Garin, *La cultura filosofica del Rinascimento italiano*, Firenze, 1961, 261. Garin, 1937, 26.

(9) Picus, *Opera omnia*, Hildesheim, 1969, 376-79.

(10) E. Monnerjahn, *Giovanni Pico della Mirandola, Ein Beitrag zur philosophischen Theologie des italienischen Humanismus*. Wiesbaden, 1960, 80-1. この点では『独身論』(*De coelibatu*) のバルバロ (Barbaro) と一致している。

(三)

前述のガレンはピーコの生誕五百年を祝う式典の講演の中で、「ピーコは粗野な禁欲主義者などではなかった。友達と祝典、女性と祝宴は彼の知らぬ所ではなかった」と述べて、直ちに「彼の生涯の中で最もセンセーショナルなエピソード」として前述の恋愛事件に話を進めている。[1] 確かに彼は女性との愛に無縁ではなかったし、マルゲリータへの愛以外に、一・二の恋愛が知られており、そのことを窺わせる詩も作っている。[2] 甥のジャンフランチェスコ・ピーコ (Gianfrancesco Pico) は叔父がかつて「空虚な愛に焚き付けられ、女性たちの魅惑に心そそられた」[3] と書き記している。「マルゲリータ体験」はその頂点であったと云うことができよう。ジャンフランチェスコはこの他に叔父の心を占領していたものが名誉欲であったことも述べている。女性への愛は思いもかけぬ破天荒な体験により、唾棄すべきものへ変わったわけだが、こちらの方はまだそうではなかった。[4] ローマで『九百の提題』を問うための『演説』はそのような中で執筆された。失地回復を図るべく、学的野心にさらに拍車がかかったとも考えられる。彼は『演説』の中で若さから由来する気負いを意識して、これを誤解されぬよう弁明している。[5]

ところで私はこれ迄ピーコの有名な作品を唯『演説』(*Oratio*)と呼んできた。「人間の尊厳についての」(*de hominis dignitate*)演説とは努めてしてこなかった。ピーコのこの作品を考える時には先づ題名から注意してかかる必要がある。この名称はピーコ自身が与り知らぬ所であって、十六世紀半ばすぎに初めてつけられた。彼自身は『哲学礼賛』とか『平和(平安)の歌』とかを考えていたことは、同じ頃に書かれた友人あての書簡で知られるし[6]、『演説』の中にもそのような箇所が明らかに読みとれる[7]。また今日の題名が全体の内容の一部にしか当てはまらず、全体を指すには不適切であることが認められる。何故なら「構成上からすると『演説』は二つの部分に区別され」、「第一部は人間の尊厳の根拠としての自由と、人間の尊厳を実現する哲学への礼賛であり、第二部はピーコが討論を企てたことへの非難に対する弁明[8]」及び提題の説明であるからである。

その哲学は伝統的な三区分、道徳学・弁証論・自然哲学に分けられ、それぞれに異なる役割が与えられる。「至上の神が望んでいるものは『平和』である」が、「われわれの中にはさまざまな不和がある。そのとき、道徳哲学は内なる激しい戦いを抑制し、肉と霊の間に聖なる平和を確立する。弁証論は弁論の背反と三段論法の欺瞞の間で苦悩している理性の混乱を鎮める。自然哲学は不安な霊魂を引きずりまわす見解の争いと不一致を鎮め[9]」てくれる。しかし本当の休息と堅固な平和を与えてくれるのは、その機能と権限を有する神学である[10]。ピーコはこのように哲学と神学の間に明らかに一線を画していて[11]、師の一人フィチーノと異なっているものの、哲学に相当の仕事を割当てている。

『演説』の中で限定されているとは云え、哲学重視に着目し、ややもすると心情的な「人間尊厳論」に流れがちな従来の解釈に対し、小気味よい観点を呈示したのは、W・G・クレイヴン[12](Craven)である。

彼は、一四八五—八六年にかけてのピーコの書簡、つまりバルバロ(Barbaro)あてとコルネオあての書簡、それに『演説』とが、修辞学に対する哲学の優位を説く、古代以来の伝統的枠組の中にあると考える。問題の『演説』は、

哲学を礼賛し、真理を知るための哲学者の観想生活を高く評価しており、二書簡とともに自身を哲学者として意識し、世事に携わる修辞学者との相違を強調しているとされる。[14] この結果、彼の『演説』解釈は、人間の尊厳や自由が主張されているという見方と真正面から対立する。「……ピーコを人間の自由と尊厳を弁護した、情熱的なルネサンスの典型と描いてきたことが、いかに誤解に導びくものであったかが分ろう。人が自己の本性を選択する自由についての章句は、形而上学的な言明でなく道徳的言明であり、それは、哲学と神学の教育的効果のための、大げさで修辞学的な論拠の一部として役目を果している。[15]」

人が自己の本性を選びとる自由は、神のアダム礼賛の中で人間の尊厳に最も関わる箇所として認められてきたが、クレイヴンはこの解釈を認めないことになる。またこの箇所――あとで全文を引用する――は、人間の堕罪と恩寵の問題に関わるが故に、たとえばP・O・クリステラー（Kristeller）は、礼賛されているアダムが創造時のアダムであって、堕落後の人間が礼賛されているわけではないこと、また人が最良の選択をする際、ピーコが恩寵の必要性を締め出す見解を採っていないことを指摘した。[16] これに対しクレイヴンはこの箇所がそもそも創造を説明しているのではなく、聴き手に選択の自由に関わる可能性の広さに注意させ、その中から最高のものを追求するよう促していると見る。[17] 神への上昇こそが最高の課題であるが、それは哲学研究により進められていくから、『演説』のひとつの主題はここにあり、従って人間の尊厳ではなく、哲学の尊厳こそが主張されていることになる。[18]

クレイヴンはこのほかピーコが人間をミクロコスモスとして見ていないとか、ヒエラルキーの外に置いて絶対的自由を主張したとかなどと云う、E・カッシーラー（Cassirer）[19] やガレン、クリステラーらの解釈にも反論を唱え、A・ダラス（Dulles）[20]、ディ・ナポリ（Di Napoli）、ド・リュバック（de Lubac）の線に沿ってピーコを理解している。唯あとの二人もピーコの思想の中に人間の尊厳と自由とが強く現われていることを見てとっているので、人間尊厳の

礼賛をピーコの本意でなく、修辞学の問題としたダラスにこの点ではクレイヴンはより近かろう。

クレイヴンに対し二、三の疑問点を呈示したい。ピーコの先の二書簡と『演説』のうち、書簡が修辞学対哲学という古代以来の伝統的枠組にあることは云えるとしても、『演説』も亦この枠に縛られているか疑問に思える。『演説』後半は『九百の提題』の内容と深く関わっているわけだが、そこには新しい哲学を開陳しようという意気込みが感じられ、従来の構造から発しているとは思われない。勿論、それがピーコの考えた程新しかったかどうかは別であるが。

また『演説』で強調されたような、神との合一に至る神秘主義的叙述が、バルバロあての書簡には欠落している。哲学者にとっての観想生活の意義は明らかに、コルネオあての書簡で強調され、『演説』で敷衍されたと見るべきであろう。

最後に、人は伝統の中でのみ生きるのではなく、体験を通しても生きていることに留意したい。クレイヴンではピーコの「マルゲリータ体験」は全く問題になっていない。この体験は無視できる程彼にとり些細な出来事では決してなかったはずである。情熱的だが暴力的な、そしてそれ故に犯罪的な略奪事件を経験して、ピーコは人間の本性に深く思いを馳せるとともに、従前から自覚していた哲学者の在り方を決定的に認識した。クレイヴンが鋭く指摘した[21]、哲学者にとっての自由[22]はこの体験に裏打ちされており、コルネオあての書簡に如実に現われている。『演説』の中のアダムへの神の話しかけをクレイヴンは「道徳的要請[23]」と見たが、これも亦体験を通してピーコにより実感されたものであると考えたい。

註

(1) Garin, 1963, 35.

(2) Garin, 1937, 17. de Lubac, *op. cit.*, 361-64.

(3) Picus, *op. cit.*, Joannis Pici Mirandulae vita. Ph. Monnier, *Le Quattrocento*, Lausanne, 1901, II, 98. フェラーラでの同棲とされにまつわる逸話については、Jacobelli, *op. cit.*, 191 e sgg.

(4) de Lubac, *op. cit.*, 365.

(5) Pico, *De hominis dignitate, Heptaplus, De ente et uno e scritti vari*, a cura di E. Garin, Firenze, 1942, 136-38°『演説』には見事な訳註と解説付きの邦訳書、『人間の尊厳について』(大出・阿部・伊藤訳　国文社　一九八五年)がある。

(6) de Lubac, *ibid.* 59-60.

(7) Pico, *op. cit.*, 118, 120.

(8) 佐藤　前掲書　二五六頁°

(9) 『人間の尊厳について』二六二頁（伊藤博明解説）

(10) Pico, *op. cit.*, 118.

(11) Kristeller, Giovanni Pico della Mirandola and his sources (nell'*Opera e il pensiero di Giovanni Pico della Mirandola nella storia dell'umanesimo*, Firenze, 1965), I, 78. cf. Craven, *Giovanni Pico della Mirandola, symbol of his age, modern interpretations of a Renaissance philosopher*, Genève, 1981, 120n. 22. なお Pico, *loc. cit.* に関し、de Lubac, *op. cit.*, 113n. 1. は次のように言っている。「彼（ピーコ）は同様に古い伝統に従って、『道徳学』、『自然の観照』、それに『神の最も聖なる礼拝』である『神学的な敬虔』(theologica pietas) の三段階を区別しており、その時彼はダビデの『歌』と聖アウグスティヌスの『解釈』に準拠している。『神学的な敬虔』という表現は『神学』と『宗教』を一つにしているが、アルドゥス・マヌティウス (Aldus Manutius) あての書簡では区別されている。」アルドゥス・マヌティウスへの書簡と言うのは一四九〇年の有名な書簡 (Picus, *op. cit.*, 359) で、そこには「真理を、哲学は探求し、

神学は発見し、宗教が確保する」という表現がある。金子晴勇『近代自由思想の源流』(創文社　一九八七年)二六二―六三頁の解釈は、私には行き過ぎのきらいがあるように思われるし、フィチーノに言及された所とともに不正確な点も見出される。

(12) 前註(11)参照。

(13) これについては佐藤　前掲書　二百五頁以下参照。

(14) Craven, *op. cit.*, 42.

(15) *Ibid.*, 45.

(16) Kristeller, *Renaissance Concepts of Man and Other Essays*, New York, 1972, 13.

(17) Craven, *op. cit.*, 82.

(18) *Ibid.*, 36.

(19) Giovanni Pico della Mirandola : a study in the history of Renaissance ideas (in *Renaissance Essays*, ed. P.O. Kristeller and P.P. Wiener, New York, 1968), 11-60.

(20) *Princeps Concordiae : Pico della Mirandola and the Scholastic Tradition*, Cambridge, Mass., 1941.

(21) Craven, *op. cit.*, 42.

(22) これについては、E. Gilson, Héloise et Abélard, Paris, 1964 (『アベラールとヒロイーズ』中村弓子訳　みすず書房　一九八七年)が興味深くも真険な事例を提供している。ピーコは「人間の尊厳」思想を考える一方で、G. Duby, *Le chevalier, le femme et le prêtre*, 1981 (『中世の結婚』篠田勝英訳　新評論　一九八四年)の中で描かれた、ヒエロニムス(Hieronimus)的な「結婚の蔑視」思想を同時に持ったのであり、これには興味深いものがある。

(23) Craven, *op. cit.*, 34-5, 45, 82.

(四)

宇宙を創る仕事が完了した時、神はこの仕事を理解し、その美を愛で、その偉大さに驚くものがいることを望み、人間の創造に思い至ったとピーコは『演説』で云う。ところが、原型の中には新しい子孫を造り出すものが、宝庫の中には新しい息子に贈るものが、世界の中には宇宙の観照者に坐りうる場が、いずれもなかった。そこで最も優れた制作者は、固有なものを何一つ持たなかった者に、他の被造物がおのおの持っているものはいかなるものであろうと共有するように定めた。こうして不特定の姿を持つ作品として人間は神によって迎え入れられ、世界の中央に置かれ、次のように話しかけられた。

「おおアダムよ、私たちは一定の場所も、固有の姿も、あなたに特別の贈り物もひとつとして与えなかった。何故ならあなたが自覚して望んだ場所・姿・贈り物を、あなたの意志、あなたの決意により所有し保持せんがためであった。他のものの限定されてしまった本性は、私たちによって規定された法の中で締めつけられている。あなたは、息の詰まるような制限一個だに設けられず、私があなたをその手の中に置いた自由意志(arbitrium)により、自分のために己れの本性を予め決めようとするであろう。世界の中にある総てをより容易にぐるりと見渡せるように、私はあなたを世界の中心に据えた。私たちはあなたを天のものとも地のものとも、また死すべきものとも不死なるものともしなかった。何故ならあなたが、あたかもあなた自身の、自由意志を持つ、名誉ある造物主であり、形成者(tui ipsius quasi arbitrarius honorariusque plastes et fictor)であるかのように、あなたが選び取った姿へ自らを造りあげようとするためであった。あなたは、獣のような劣性のものに堕落することもできよう(Poteris in inferiora quae sunt bruta degenerare)が、またあなたの魂の意向により、神的な優れたものに生まれ変わることもできよう(poteris in superiora quae sunt divina, ex tui animi sententia, regenerari)[1]。」

以上が『演説』の中で最も有名な箇所であり、文章である。そして全体に亙って引用に次ぐ引用で、一体どこに地の文があるのか分らなくなるのに較べれば、極めて分り易い所である。ここはピーコのような恐るべき学識がなくても一読できるし、恐らくそのために後世の人が、『演説』の冒頭から始まってこの辺で頂点に達する印象を通して「人間の尊厳」という題を考えついたのであろう。率直に云って近代的な個人主義者には魅惑的な表現である。ここを読む時、東洋人も非キリスト教徒も唯「近代人」でありさえすればいいのであって、プラトンの『プロタゴラス』(三二一C—D)や『創世記』の知識も必要ないように思われる。

しかしながらそのことは事柄が明確であることを意味していない。そのためにピーコ研究の上で最も議論が多い所のひとつがこの箇所の解釈を巡ってである。カッシーラー、クリステラー、ガレンをはじめとする数多くの学者の、云わば近代的解釈に、近年異を唱えたのが、前述のクレイヴンであり、またド・リュバック[2]であった。論争的な方法でピーコの既成像に破壊的で挑戦的であるクレイヴンに対し、ド・リュバックは、先行する研究者の納得ゆく成果は一方で取り入れつつ他方で豊かな学識を駆使して、積極的なピーコ像を呈示する。カトリック聖職者として師は、ピーコをキリスト教の聖書的・教父的伝統と一致する思想家として捉え、同時代人ではエラスムス(Erasmus)、後世の人間ではベリュル(Bérulle)、そしてパスカル(Pascal)との類似性・関連性を明らかにした。

翻訳し、紹介した箇所を中心とする『演説』から、ピーコは、アダムを「神の像と似姿」に創造することを考えていないとか、また彼は存在の階序から人間を外して不安定な状況に投げ込んだが、他方ではマクロコスモスの影響を受けざるを得ぬミクロコスモスとは最早せず、自己を自由に形成する権限を与えたとかいう解釈が生まれた。『演説』の中には確かに恩寵やミクロコスモスの概念はない。しかし概念はないからと云って、それらしき考え方や説明がないわけではない。そのことは翻訳し、紹介した箇所からも読みとれであろし、彼の別の作品、たとえば一四八九年

刊の『ヘプタプルス、「創世記」の六日間に関する七部から成る物語』(Heptaplus, de septiformi sex dierum Geneseos enarratione)を見れば明快であり、存在の階序の外に人間を置いたというクリステラーの主張も怪しくなってくる。

ド・リュバックもクレイヴンも方法は異なるが、異を唱えた点はほぼ同じであり、さらにはピーコの思想の中にシンクレティズム的傾向、自然宗教の始まり、マジック的嗜好を見たりする研究にも反論を加えている。ピーコに対する誤解が生じた一因として、ピーコの作品を正確に読んでこなかったことを期せずして挙げている。ピーコは近代人であり、『演説』はそのマニフェストであるという考え[3]が研究者に色眼鏡をはめさせたのであろう。ド・リュバックはカトリック神学者らしく、ルター神学のみが直のキリスト教神学であるという考え方からも認識不足が生じたと云っている[4]。この指摘はニーグレン(Nygren)のフィチーノ解釈[5]の傾向性を想起せずにはおかない。

『演説』を巡る問題のひとつは、これと『ヘプタプルス』との関係をどう見るかにあるように思われる[6]。クレイヴンは前述した通り『演説』をある意味で特殊化し、『ヘプタプルス』とは全く異なる主題を扱っていると見た。彼にとり『演説』は創造論などでなく、機会から生じた弁論的作品であり、キリスト論などそもそも期待するのが間違いであった。それは『ヘプタプルス』が扱うことであった[7]。それに対しド・リュバックは両著作の間に首尾一貫したテーマの流れを認めており、両者間の相違に注目してそこにローマ教会との衝突を考える解釈を根拠のないものと否定する[8]。

思うに前者の『演説』を巡って多様な解釈が生じるのは、ピーコ自身の叙述に一因があるのではあるまいか。否、もしかしたら彼はこれを意図的にあいまいにしたのかも知れないし、或いは重要なことと思ってもいなかったかも知れない[9]。後者に関しては教会との対立がそれを意識の上に置くようになったのではという推定も決して不可能ではあ

るまい。――『演説』を読んだ範囲では、神は人を造ったが、造ってしまっているとは云えない。確かにここに流出説による生成はないが、造り上げられなかったことの責任が神に向わぬよう配慮されている。飽くまでも完成するのは人間の責任である。とすれば本当に造ったのは誰なのか。こうして恩寵の意義も不鮮明になってくる。ド・リュバックと違い、『演説』の『ヘプタプルス』との隔たりは大きく、気にならざるを得ない。

しかし『演説』以後、コルネオあての書簡を含めてピーコの思想の中に変わらざるに流れ続けたものがある。それは、人は生き方次第では獣のような存在に堕落する可能性があるという観念であり[10]、逆の、神のごとき存在に上昇するという観念は控え目に見られているという事実である。控え目という意味は受身の動詞が使われていることを指す。引用された最後の行の regenerari（再生される）がそうであり、外的な力の働きを想定できよう。『ヘプタプルス』ではたとえば「恩寵により改められ（reformati）、人間から神の子らの養子に生まれ変った（regeneramur）[11]」と云われている。

欲望に負けて獣に成り果てるという考えはやはり『演説』以外に、『ヘプタプルス』の今引用された箇所と同じ所に、そして『存在と一者について』[12]（De ente et uno）の中に見られる。前文と全十章から成り、初めは極めて論理的な叙述が進められて行くが、五章から神秘主義的な傾向を帯びるこの作品は、最後にこう云われる。――『聖ヨハネの第一の書簡』にあるように、肉の欲、目の欲、生活のおごりなどを捨てれば、我々は人間らしく、つまり理性的な生き物になろうが、現実には肉欲に支配された獣であるだろう。[13]甥あての晩年の有名な一書簡（一四九二年五月十五日付）にも肉欲と獣化の結合された叙述[14]が見られるし、またこれらに尽きるものではない。

ピーコが獣化の観念を得た一源泉は『詩篇』の一節（四八・二一）であった。「人間は名誉の中にある時、分らなかった。愚かな駄獣に等しい存在となり、それらに似た存在になることを。」この云い廻しは『演説』、『愛の歌註解』、

『ヘプタプルス』、書簡その他で用いられている。[14]

これに反して逆の、云わば聖化の観念も『詩篇』にあり（八一・六）、そこでは「私は云った――あなたたちは神々であり、またすべて卓越した子である」と云われている。これは使徒聖ヨハネも引用した（十・三四）が、ピーコは『演説』の中で『詩篇』の両節を以下のような文脈で用いる。

神のアダムの呼びかけは今見た所であるが、こののち、人間には欲するものになれることを許した神の寛大さが、『演説』で讃えられる。唯人間が誕生した時、あらゆる種類の種子と生命の芽が与えられたため、彼はその育成によっては、植物・獣・天界の生き物・天使ないしは神の子・神との合一のいずれかに至る。こうして人間の中にはいろいろなものに変化するカメレオンが住んでおり、そのことは驚きに値する。しかし腹を満たすことのみを考えて地上を這い回ることになったり、カリュプソなどに幻惑されて、感覚に身を任せてしまうことになれば、最早その時は人間ではなく、ただの灌木、ただの獣である。このような存在は驚嘆に値しない。それでは何のためにこのさまざまの本性はあるのか。それは、人間がありたいと欲するものになるという条件で生まれている以上、人間は名誉の中にある時は分らなかった、愚かな獣や駄獣同等になることを、と云う言葉を云われるためではなく、寧ろ、預言者アサフの「あなたたちは神々であり、またすべて卓越した子である」と云われんがためである。人間は至高なものを希求し、（欲すればできるのだから）到達すべきあのものへ向うよう、ある神聖なる野心（sacra quaedam ambitio）を精神に吹き込もうではないか。目指すはいとも優れたる神性の至近にある超世界的宮居である。[16] そのための方法・手段として、前述した哲学の三部門、道徳学・弁証法・自然哲学と神学とがあり、このあとそのことが詳細に説明されてゆく。これらの学問のうち道徳学と弁証法は取り分け、欲望を抑え、精神を清めるのに役立つことが繰り返し強調される。[17] そして最後に、ピーコ自身が哲学研究に向った理由が告白され、欲得ずくの研究現況と対比されて、『演説』の

前半部が終了する。

註

(1) Pico, op. cit., 104-106.

(2) (1)の註(7)参照。

(3) cf. Jacob Burckhardt, *Die Kultur der Renaissance in Italien*, Stuttgart, 1966, 330-31.

(4) de Lubac, *op. cit.*, 115.

(5) *Agape and Eros*, London, 1939.（『アガペーとエロース』岸・大内訳　新教出版社　一九七四年　第三巻　二四五頁以下。）唯ピーコに較べれば、フィチーノは人間が神そのものになるという欲求を自然的と考える傾向が強いと言っていいかも知れない。de Lubac, *op. cit.*, 74-5.

(6)『人間の尊厳について』解説、二七四―七五頁でも指摘されている。

(7) Craven, *op. cit.*, 82.

(8) de Lubac, *op. cit.*, 76-7.（Garin の主張に対して）、182（L. Braghina の主張に対して）。ガレン、ブラギーナの両論文は(1)の註(11)に挙げた論文集、*Opera e il pensiero* のIとIIにそれぞれ収められている。

(9) cf. van Gelder, *The Two Reformations in the 16th Century*, The Hague, 1964.

(10) この観念の歴史は de Lubac, *op. cit.*, 184-204. に詳しい。

(11) Pico, *op. cit.* Hep., Exp. 4, 7.

(12) これについては拙論「フィチーノとジョヴァンニ・ピーコ――ルネサンスにおけるプラトンの『パルメニデス』解釈の相違について」（史観　百八冊　一九八三年）七一―八四頁参照。

(13) *De ente et uno*, c. 10.

(14) Picus, *op. cit.*, 340-42. これは *Prosatori latini del Quattrocento*, a cura di Garin, Torino, 1977, 824-833. にも収められている。

(15) これらの分析については de Lubac, *op. cit.*, 66, 205. 参照。それはド・リュバックによると「ピーコにおける変わらざる思考」である。

(16) Pico, *op. cit.*, 106-10.

(17) *Ibid.*, 118-30.

結語

前節で述べた、人間の獣化に関する表現は、古代の教父や中世の神学者にも見出される、ある意味では月並みな表現だが、ピーコの場合は、それが実感として体得される個人的・直接的経験に基づいていた。彼にとっての「マルゲリータ体験」は、キェルケゴールの「レギーネ体験」になぞらえることができる程の意義を有した。「あなたは、獣のような劣性のものに堕落することもできようが、またあなたの魂の意向により、神的な優れたものに生まれ変わることもできよう。」ピーコを最もよく知る研究者の一人、ガレンはルネサンスの cause célèbre に常に関心を抱き続けてきたが、『演説』に自伝的調べがあることを指摘している。[1] この作品や『ヘプタプルス』程知られていないが、ピーコには禁欲文学に属する神学的・宗教的著作があり、これにも「マルゲリータ体験」や教会による断罪体験と深く関わり合っていると見られる。そのほか『詩篇註釈』[2] (Il commento al salmi) や甥あての一四九二年の書簡二通も、そのような文学から落とすことはできないであろう。コルネオあての書簡とともに、トマス・モア (Thomas More) が英訳したのは、これらの作品であった。

「マルゲリータ体験」は人が堕落の可能性内にあることを教えた。『演説』の中の話しかけられたアダムが原罪を犯す前のアダムであるから礼賛されている、と考えるのは間違いである。「神の像と似姿」に造られたばかりの人間に対し、原罪以前の段階で「堕落することもできる」と神が云ったとしたら、ここの神は一体何なのか。「神の像と似姿」とは一体如何なる意味があるのだろうか。ピーコはキリスト教の教義を離れて一般的に人が堕落しうる存在であることを云っているのである。

『演説』の中で哲学が評価され、哲学者の生き方が理想とされたのは、公的生活と全く対照を成す生活が体験を通して価値ある生き方として捉えられたからである。それは禁欲的ながら自由な生活と判断された。婚姻は哲学者の自由を奪うものであった。甥はピーコが結婚を拒否したのは、自由が何よりも大事であると考えたからと云っている。[3] 著名な封建貴族の一家に生を享け、第三者から見て活動生活を送ることを当然視されてもおかしくない環境の故に（尤もピーコの母は教会人としての道を望んでいたが、この時既に死去していた）、友人コルネオはくよくよせずに世間に出てくることを勧めた。また彼は普通のキリスト教徒らしく、誘惑に負けたくなければ結婚すれば済むことと軽く考えた。聖パウロは云っている。「淫行を避けるためには、男は各々妻を持ち、女は各々夫を持つがよい。」「マルゲリータ体験」を通して、ピーコは「哲学に与らぬ者はある程度獣に変っている」[4]というフィチーノの言を、獣に堕落しうる存在である人間は、哲学によってより高次のものに上昇できると取ったであろう。[5]『演説』後半の『九百の提題』呈示の部分は、彼の長年の学生としての研鑽の賜物であるが、所謂「人間の尊厳」に関わるアダムへの呼びかけは、卑近な体験を通して確認された人間観となったろう。

『演説』と同時期に執筆されたものに前述したように『愛の歌註解』がある。「愛」の概念は、「美」のそれとともに、ルネサンスの文学と哲学の問題を考える上でのキーワードであり、研究紹介されねばならない大きな主題である。

ルネサンス美術だけの問題ではない。ピーコのこの作品は一体験から生まれた「機会詩」などではない。これについて述べるには紙幅に余裕がないので、「マルゲリータ体験」に関連して一言述べておきたい。『演説』で云われたごとく人間が中間的存在であったように、俗愛（人間の愛）も亦、天上の愛と禽獣の愛の中間に在り、往々にして純然たる欲望である獣の愛に堕してゆく危険な愛であった。この『註解』が大いに負っているフィチーノの『愛について』(*De amore*) も俗愛がいかに災いとなるかを記している。[6] ルネサンスのプラトン主義者たちと同じくピーコは、俗愛を真実の愛とは捉えず、神との和合（pax unifica）に昇りつめる（ascensus）愛を本当の愛と見なした。[7] しかし彼は誰よりも先づ「マルゲリータ体験」を通じて、人間の魂が精神世界と物質世界に引き裂れた存在であることを実感したに違いない。[8]『註解』の中にこの体験を直接窺わせるものはないけれども、「神秘主義的エロス主義」(erotismo mistico) の見地から再考してみることは興味深い題材のように思える。[9]

『演説』の、特に最初の箇所の究極的魅力は、しかしながら、『演説』の背景にある伝統と体験を越えた所にあることは間違いない。ではそれは一体何か？「選択」をつきつけられた岐路に立つ人間が描かれているからであろう。[10] ここにピーコの近代性が見られ、このテーマは普遍性を帯びるのかも知れない。しかしたとえば若い日のマルクス (Marx) の「職業の選択にさいしての一青年の考察」[11] を読む時、人はピーコに類似の遠い反響を聴く一方で、十五世紀と十九世紀の隔たりを感じとることになろう。

註

(1) Garin, 1961, 248.

(2) *Ibid.*, 241-253.

(3) J. Dukas, *Recherches sur l'histoire littéraire du quinzième siècle*, Paris, 1876, 51n. 1.

(4) Ficinus, *op. cit.*, 751.

(5) cf. de Lubac, *op. cit.*, 201.

(6) Marsile Ficin, *Commentaire sur le Banquet de Platon*, éd. et trad. R. Marcel, Paris, 1978, 256.

(7) G. Paparelli, *Feritas, humanitas, divinitas, l'essenza umanistica del Rinascimento*, Napoli, 1973, 292-95.

(8) Ch. Nelson, *Renaissance Theory of Love*, New York, 1963, 84.

(9) cf. G. Semprini, *La filosofia di Pico della Mirandola*. Roma, 1986, 134. I.P. Couliano, *Èros et magie à la Renaissance*, 1484, Paris, 1984, 88-9.

(10) ルネサンスにあっては神話上の人物としてはくラクレスがこの意味で非常に好まれた。A. Chastel, *Art et humanisme à Florence au temps de Laurent le Magnifique*, Paris, 1961, 274-75.

(11) 『マルクス＝エンゲルス全集』（大月書店、一九七五年）第四十巻　五一五一一九頁に所収。